最寄駅

ナカノリエ

この駅にはあの人が住んでいる。

それは意外なところで知ったことだった。
私が院卒入社三年目の野山君のファンということは半分くらいネタになっていて、みんな知っている。

ある日のランチのこと、後輩の女の子と珍しく二人だった。
「そういえば、野山さんに会ったんですよ〜。」
ふうんと相槌を打つと彼女は続ける。
「日曜日、たまたま彼氏の実家に用があって遊びに行ったんですよね、そしたら駅で会って挨拶なんかしてくれて。最寄りが彼氏の実家と同じ駅だったんですよ〜。」
ふうん。
いつも、静かにニコニコしている穏やか君のプライベートについては一切知らなかった。
「なおさん、チャンスじゃないですか？」
なおは、その駅のいくつか隣の駅に住んでいた。
とはいえ、通勤とは逆方向なので、その駅は何かで通り過ぎたことはあっても、降りたことはなかった。
「チャンスって言われてもねぇ。ファンはファンだから。」
笑って濁そうとすると、案外しつこく続けてくる。
「飲み会帰りとかさりげなく一緒に帰ってみたりとか。」
いやに具体的にいってくる。
「なおさんには幸せになってほしいですからね。」
それじゃまるで、私だけが不幸みたい。
「だいたい、何年彼氏いないんですかー？」
そっか、そうだったね、もうすぐ彼氏と結婚するんだっけ。
「もうわかんない、数えてないし。」
と笑って、話題を切り替えようとした。
「また、飲み会で先輩たちにつつかれますよー」
大きなお世話、と思いながら、
「ありがとう、ご心配おかけします」
ということで勘弁してもらった。

確かに、なおは、恋人がいない。
何年か。
特に数えていないけれど、確かに何年も。

会社に入った頃は、学生時代の恋人がいた。
何年かしたら、結婚するのかも、と思いながら、ある日、彼が転勤になることになった。
思ったよりも早く結婚するのかも、と思ったけれど、
「俺らの年月考えたら、遠距離恋愛、余裕でしょ、なおも総合職だし、もったいないよ」
そう言って、遠距離恋愛が始まった。

最初の頃はお互いに、月に一回ずつ、お互いのところを訪れた。
と言っても、なおは実家暮らしだったので、彼のくる金曜の夜はホテルに泊まった。
こちらが向こうへ行く時は一人暮らしなので、金土と泊まって新幹線で帰った。

そこそこ、彼の勤務地にも明るくなってきた。
いつものように、缶ビールを下げて彼の家の前へ辿り着くと女の子が立っていた。
「あ、今週でしたっけ？」
女の子は悪びれた様子もなく、言ってのけた。
彼だけが落ち着かない様子だった。
「あ、会社の子なんだ」
と、なおに紹介した。

高卒の社員の子なのかな？
短大生か、その振りをしている高校生に見えた。
事実がどうあれ、もう関わるのがめんどくさい。
今更ケンカする気にもならないし、ヤキモチを焼くどころか、呆れた。
まあ、長い付き合いで友達のようになっていたし、いずれはそうなる流れだったかも知れない。
それならそれで、先に別れたらいいのに。
「お気遣いなく」
後ろから「違うんだよ」と叫んでいる声が聞こえたような気もするけれど、
追いかけて走ってくるわけでもなく、ほんの少し悔しかったけど、あっけなく幕を閉じた。

週明け、お昼休みのこと、
「あれー、なお、今週はお土産ないのー？楽しみにしてたのに。」
と同期のアキが言った。
「ないない、これから、もうないから。」
そう言うと、
「えっ？別れたの？」
とアキが目を丸くして言った。
「だからついていけばよかったのにー。」
だからってことはない、そういう人はそういう人。
最初からこういうやつだとわかっていなかったことが口惜しい。
「じゃあ、彼氏の友達紹介するから」
と、次々に酒宴が繰り広げられた。

なおは数年ぶりの恋人なし生活を案外楽しんでいた。
ただ、実家だけは出ることにした。
「ママ、なおちゃんは、たかしくんと結婚すると思ってたのに。」
と母がしつこく嘆くのだ。
それがちょっと、うっとおしかった。
そして、実はこっそりお金も貯めていたのだ、結婚すると思って。
結婚するかもしれない貯金はあっさり一人暮らし資金へと変わった。

「貯金か～、しておくもんだね～。」
一人暮らしの引っ越し祝いにサヤがやってきた。
サヤは絵描きになりたいと言い出して、大学を途中でやめて、画塾に通っていた。
今も絶賛、絵描きの修行中、バイトもほどほどに抑えている。
「そう言ったって、サヤだって、貯金はしているわけでしょう？」
「私の場合は絵を描く旅行に、貯まっては消えしているから、こんなに一気に使えるほどは貯めてないよ。」
インテリアに少し凝ったので、高い部屋にでも見えたのだろうか。
サヤからのプレゼントの絵は部屋の一等地に飾った。

サヤとは不思議な縁で繋がっている。
サヤが大学を辞めたのだから、そこで縁が切れても不思議はなかったのだけど、
波長が合うというか、会いたいなと思って連絡を取ると、
私も会いたいと思ってたとこ、と、いうことが続いた。
なおが社会人になり、その期間が長く空くようになっても、サヤは「あ、私も会いたいと思ってたとこ」
と言って、いつでもお決まりの喫茶店に出向いてくれた。
たわいもないおしゃべりをして、別れた。
そういえば、お互いあまり恋愛の話はしない。
他に話すことがたくさんあるからだ。

野山君の最寄駅を聞いた午後、ふと、サヤのことを思い出していた。

もう随分会ってないな。
仕事中にメールを入れてみた。
「サヤへ　どうしてる？　なお」
サヤは絵を描きに行った旅先で知り合った人と結婚した。
もう、２、３年にはなるだろう。
「なおへ　久しぶりです。この間、子どもが生まれました。男の子です。今度会いに来ませんか？　サヤ」
おお、サヤらしい。
子どもが生まれてもお騒ぎせずか。
「楽しみです。名前は？今度の週末はどう？　なお」
この間って、一体いつだろう。
「名前は、太朗です。週末、是非。」
可愛らしい赤ちゃんの写真が添付されていた。
ただ、なおは赤ちゃんとはあまり縁がないので、その赤ちゃんが生まれてどのくらいなのかわからなかった。
育休中の先輩が、復帰前に子どもを連れてくることはたまにあった。
でも、それがだいたいどれくらいで、など、覚えていられなかったし。
そういえば、サヤって今どこに住んでいるんだろう。
「どこの駅だっけ、家」
「稲田堤」
稲田堤、さっき、聞いたような。
そうか、野山君の最寄駅だ。

案外というか、あまりにも近くに住んでいるので、おかしくなってしまった。
何年か連絡を取っていなかった友達が、いくつか先の駅に住んでいるなんて。
「行く、行く、是非とも行きます、まだ、私、最初の一人暮らしの部屋のままだからさ、近所。」
「そうだったのか～、連絡取らなくてごめんね～」
週末の予定は決まった。

出産祝いは何がいいのか、先輩たちに聞いて、会社帰りにスタイを買った。
よだれかけのこと、スタイっていうんだー。
可愛らしい四つ葉のクローバーの刺繍がしてあって、縁取りは緑と白のギンガムチェックのバイヤステープ。
「スタイだったら何枚あってもいいからありがたいし、いただいても負担にならない価格帯だからね。
　けど、自分で買うとなったら、可愛いのが欲しいのに、案外もったいないーって、
　なっちゃうものだから、きっと喜ばれると思うよ。」
二人目のお子さんを産んだ先輩の言葉が背中を押してくれた。
「それから、お土産は気をつけて、甘いものは乳腺炎になっちゃう人もいるから、聞いてからがいいよ」
と。乳腺炎ってなんだろう、なんだかとっても辛そう。
「お土産は何がいい？甘いものでも大丈夫？」
「もうミルクだから、大丈夫。甘いもの歓迎。」
甘党のサヤらしい返事が届く。
じゃあ、遠慮なく、地元自慢の、スフレチーズケーキをお持ちしましょう。

なおのスニーカーは、稲田堤のホームに降り立った。
出産祝いと、チーズケーキを持って改札へ向かうと、太朗くんと思しき赤ちゃんを抱っこしたサヤがいた。
「久しぶり。旦那さんは？」
「シフト勤務だから、今日は仕事。ゆっくりしていって。」
駅からは程よい散歩道だった。
子どもが出来て急に引っ越してきたこと、彼の通勤には少し不便になったけれど、
彼の実家と数駅違いで、時々手伝いに来てくれていることなど話してくれた。
「本当は母乳で過ごしたかったんだけど、出なくなっちゃって、ミルクになった。
　でも、そしたら、気楽に見てもらえるようになって、今は、絵を描く時間まで出来たの。」
もしかしたら、ショックな出来事だったのかもしれない。

けれど、絵を描く時間まで出来た、といったサヤの顔はすっきり、生き生きして見えた。
「とっても泣き虫でさ、夜泣きとかされたりとか、自分はタフだと思ってたのに、
　太朗の方がよっぽどタフでさ、かなわないの。
　結構、メソメソ過ごしてたんだよー、私。
　でも、絵が描けるようになったら、すっごく楽。」
サヤにとって、絵を描くことがどれだけ大きなことなのか、自分にはないものだけれど、
サヤが楽になるなら何よりだ。
それにしても、あんなに寛大なサヤが手を焼くという、この小さな太朗くん。
会社の仕事のできる先輩も、子育ては別！と飲み会で叫んでいたけど、赤ちゃんって、みんなそうなのだろうか。
サヤの家に着くと、太朗くんはニコニコとベビーラックに座っていた。

サヤらしいさっぱりとした家の中にサヤの描いた絵が飾られている。
一つ雰囲気の違う絵があるなあと思ったら、旦那さんのものだという。
絵を描く人だっけ？と尋ねたら、ふふっと笑って、
「私があんまりメソメソしているから、それ、泣いてる私を描いたんだって。」
といった。
全然似ても似つかないけれど、そう言われると、そこにサヤがいるように見えたからおかしかった。
「旦那さん、なんで、描いたんだろう」
「わかんない、でも、そんなところが面白いと思う」
「不思議」

野山君ファンクラブの話をしてもよかったのだけれど、
やはり、サヤとはそういう話にならない。
とりとめもないおしゃべりをしながら、チーズケーキを食べた。
生まれて初めて、たんぽぽコーヒーというのを飲んだ。
「もう母乳じゃないから普通のコーヒーでいいんだけど、残ってるのがもったいなくて。」
と笑った。
「妊娠中だけかと思ったら、その後も結構大変なんだね」
というと、
「ほんと、大きくなったら楽になるから今だけよって言われるんだけど、その今が果てしないよ」
と笑った。
未知の世界は、頼もしい友達でさえ、暗中模索らしい。

気がつけば夕方になっていた。
送るからとサヤは言ってくれたけど、太朗くんが寝ているので、道も覚えているから大丈夫、といった。
少し一人で散歩してみたい気分だった。

夕焼けの時間に外にいるなんて、久しぶりかもしれないなー。
いつもは会社の中だし、休みの日は、家にいるし。
なんだか不思議な気分になりながら歩いていた。

野山くんはこの駅に住んでいるのか。
少しお近づきになった気分と思って、バカだなーと心の中で笑った。
「あのー」
後ろから声がして、振り返ると背高ノッポの穏やか君が立っていた。
びっくりしたりはしない、最寄駅だもの。
「浅井先輩は登戸でしたよね？」
「そう、知ってたの？」
「はい。あ、今日は？」
「友達のところに」
「彼氏ですか？」

「ううん、恋人はいない、友達に赤ちゃんが生まれてお祝いに」
「そうなんですね、よかった」
よかった？
「じゃあ、お気をつけて」
「あ、ありがとう」

少し歩きかけると、
「あの、駅まで送ります」
と並んでいた。

「ありがとう」

影が二つ並んで、小さく幸せな気分になった。